

孫内遺跡発掘調査報告書

1973年



# 発掘地点遠景

## 1 全 景



北に突出した舌状台地上で標高約 80m の地点にあり、南東部斜面に集落地が存在していた。

## 2 発掘地点



発掘地は我満清兵衛氏所有の林地及び畑地で、かつては草刈り場と放牧場であった。

## 孫内遺跡発掘調査報告書

### 目 次

|       |    |
|-------|----|
| ○序    | 3  |
| ○報 告  |    |
| はじめに  | 7  |
| 遺跡の概要 | 7  |
| 発掘経過  | 8  |
| ○実測図  | 11 |
| ○写 真  | 14 |

## 序

青森市内には、72 個所以上の遺跡が発見され、恵まれた文化遺産をかかえておりますが、青森市においても各種の開発事業は、量的・質的にも大規模化・複雑化し、遺跡の保存との両立は極めて困難な状態であります。

行政当局も事前に遺跡の分布調査を縮密に実施し、都市計画・工事計画の段階において開発側と連絡をとり、協議しながらその保存につとめておりますが、現実には行政上非常に困難な問題を残しております。

われわれは、できるものならそのまま保存したいと考えておりますが、開発上やむなく破壊されるものについては、発掘調査を行なって記録を保存し、それを後世に伝えることと思っております。このような態度で、われわれは遺跡発掘調査をしてまいりました。

このたびの孫内遺跡の発掘調査は、国・県の補助金の交付を得たものの、決して十分な費用ではなく不十分な調査体制にもかかわらず、炎天下 30 度を越すことも度々の夏期休暇中、泥と汗にまみれて作業に従事して下さった調査員、・学生・高校生の方々のご苦勞に厚く感謝申し上げます。

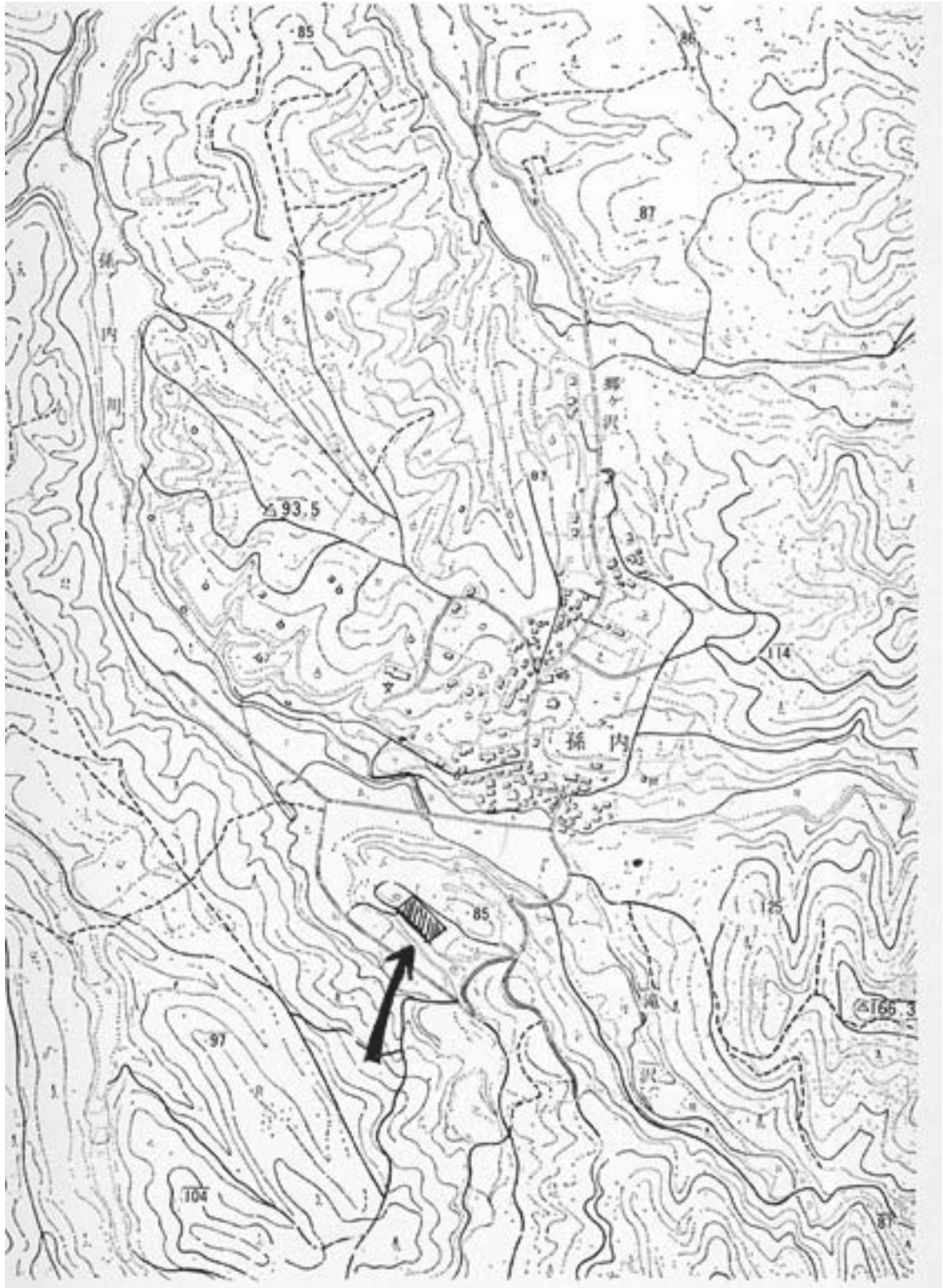
おかげで東北北部に於ける縄文時代中期末葉から後期初頭期の集落形態の解明に多くの成果を上げることができました。本報告書は、その成果をまとめたものであり、今後の研究調査の資料としてご活用されれば幸いと存じます。

昭和 48 年 3 月

青 森 市 教 育 委 員 会  
教 育 長 杉 田 貞 作







拡大図  $1/10,000$  遺跡付近図

発掘区及びグリット番号割り付け

No. 2 回



# 孫内遺跡発掘調査報告書

## 〔はじめに〕

孫内通跡に関する学術的意義として、現在縄文時代中期の具体的内容が、東北北部に位置する、わが青森県でも東北南部の各県にしても、内陸部を中心としたものであったこと。そしてそれが後・晩期になると海岸部の貝塚を中心としたものに転化したことが、再び論じられつつあるが、未だ的確な把握はなされていないのが現状である。そこで、中期縄文時代から後期縄文時代への変化の様相を基本約な資料に基づき追求することにある。また、中期縄文時代から後期縄文時代への変化は、日本の原始社会上どのような意味を有するのか、またその変化の必然性と要因が何であるのか。そして、そこに何らかの人間と自然とにおける法則性が見えだされはしないか、ということを検討したい。本質的には、時代区分の問題として換言されるわけであるが、空間と時間両者の概念を総体として統一的に把握することによって解決の糸口が見い出せるように思われる。

これまでは緊急発掘調査と云えば、遺物の取り上げ、単に記録の保存だけのように比判されがちであったが、今回は、遺構を徹底的に追求してみたいという気持ちからまず出発し、記録保存の措置をとりながらも未解決部分は、次回の調査まで埋め戻しておき、将来の学術研究に支障のないようにしようということで、単に遺跡を破壊から守るということだけではないということを強調したい。

## 〔遺跡の概要〕

国鉄奥羽本線・鶴ヶ坂駅より南西約3.5km入りこんだ山間地にあり、孫内川上流の舌状台地（標高約80m）で、北側に孫内村の台地を望む。現在は、畑地と植林地になっている。その台地一帯が遺物包含地となっており、農業構造改善事業及び農道の整備により、土・石器が発見され、昭和41年頃から注目されはじめた遺跡で、44年青森市教育委員会社会教育課の塩谷、山口の試掘調査によって、石囲炉を伴う住居址の検出をみたので、重要遺跡として登録された。地形学的特徴としては、孫内川は、土筆森山のいわゆる`三系`から成る山岳地帯から発し、その支流派生の状況はきわめて複雑な様相を呈してて、山岳地帯を出た後、扇状地性低地を刻んで新城川へと合流している。また、地質学特徴としては津軽半島の中山山脈の延長部に当る第三系は、土筆森山層（主体一凝灰質砂岩）、天田内川層（同）、鶴ヶ坂層（主体一浮石質凝灰岩）等の鮮新世の堆積物のみである。

（塩谷 隆正）



## 〔発掘経過〕

### C・D区について

C・Dトレンチ調査結果は住居址3基、袋状ピット1、大ピット4、未確認落ち込み1であった。

C・D区における住居址は大部分が複合している（1号住・2号住）。これら住居址は第一層表土層除去の際認められた。4区北半においては表土層下直ちに地山に移行しており南半には黒土層が広がっていた。この接点で住居址の壁ラインが弧状に認められた。

黒土層は、軟かい黒色土と、ややしまった黒褐色土層に区別され、そのプランにより2軒の住居址複合と見なした。黒色土は円形プランを示しており、これを1号住居址として、2号住居址より新しいものと考えた。

1号住居址は直径4mのほぼ円形である。発掘進行中、黒色土層中より縄文時代後期十腰内Ⅱ・Ⅲ類（加曾利B式相当？）の土器が同一レベルで3個体出土した。しかしこれらの土器は住居址床面より10cm程浮いており、更に柱穴上部に存在する為、又後述する3号住居址との切り合いから1号住居址に伴わないものと判断された。1号住居址の壁はその $\frac{3}{4}$ が2号址を切って存在する為、黒色土層と黒褐色土の接点での硬さによって認定された。この壁ラインは柱穴列と一致するので正当とされよう。

1号住居址は大部くずれてはいるが、配石炉をもつ。炉は住居址中央から南寄りに存在する落ち込み部分に構築されていた。配石炉を除去すると、その下に袋状ピットが見いだされた。袋状ピットは口径90cm底径165cmを計り、探さ80cmの平底フラスコ形を呈している。このピットは口径部を黄色土で張って封じてあり、上に焼土、配石炉が位置することから1号住居址に伴うものではないとされた。尚、袋状ピット中よりクルミ炭化物2、クリ炭化物1が検出された。

2号址は前述したように、1号址とその大部分が複合しており壁面は破壊されている。残存壁とピット列から復原すると4m×4mの円形ないしは、隅丸方形になるものと考えられる。

3区においては径約5mを計る円形住居址が発見された。これを3号住居址とする。3号住は1・2号址を切っており両住居址より新しい所産であり、Ⅳ号ピットによって切られている。3号住居はその壁の確認された部分において周溝があり、周溝中、又は周溝に沿って柱穴列があった。住居址床面を精査すると、ほぼ中央部に張り床と焼土面が検出され、一時は更に住居址が存在するかとも思われたが、張り床面を除去すると3個の大ピット複合であることがわかった。これら大ピットはⅠ号ピット（径約2m探さ表土より3m）→Ⅲ号ピット→Ⅱ号ピットの順で新しくなっている、Ⅲ号ピット出土の土器は後期初頭の所産でピット群住居址群、構築に編年的位置を考える資料となり得ると思われる。

以上より総合すると、担当区における遺構構築順序は、

袋状ピット→  
2号址→ 1号址→3号址→Ⅳ号ピット

Ⅰ号ピット→Ⅲ号ピット→Ⅱ号ピット

となる。出土した土器からみると、ほとんどがまだ分類されない一型式群中に含まれ、榎林式以前の

ものは検出されていない。又、十腰内Ⅰ類もなかった。十腰内Ⅱ～Ⅲ類は前述したように1号址には伴わず、脇号ピットからも検出されないところから、これら遺構群は榎林式最花式以降、十腰内Ⅰ類に先行するものと考えられる。この分析はいささか独善的であると思われるので、識者各位のご意見をお伺いして改めるべきは正していくつもりである。

## F区について

第1層は耕作土で黒褐色土。第2層は褐色土。第3層は褐色土で炭化物を少量含む。第4層は黒色土で炭化物を多量に含む。第5層は黄褐色土で地山である。

遺物包含層は、第2層以降である。第2層より第4層までは後期初頭のものとみられる土器片と、石鏃、剥片、細片、土偶片等が出土している。

第4層下に焼土の堆積が発見され、さらに掘り進んだ結果、焼土の下に礫で囲んだ炉址が発見された。この炉址は、かなり規模の大きなもので、直径で1m10ほどのものとみられる。全て残っていたわけではなく、互いに弧を描く礫3～4個が、対面する形で発見されたものである。その弧の軌跡をたどれば、明らかに連結するものである。石囲炉を発見した段階で、さらに拡張し、同レベルまで下げてみた結果ピット列を確認しえた。このピット列も、明白に連結するものであるが、その形態からは、正円を描くものとは思われなかったが、楕円形あるいは、隅丸方形とも断言はできないものである。このピット列の西半分は、しっかりしたものであるが、東側のものは形状が不整形で、探さが一定せず、あまり良い状態のものとはいえない。壁の検出に努めてみたものの、西側にそれらしきものが、みられたのであるが、地山を掘り込んでいないものではないので、不確実で、削っていったところ、確認できず、壁の検出は出来なかった。セクション・ベルトは結果的に、住居址の中心部にピッタリと決まっていたのだから、落ち込みがあった場合には確認しうるはずであるから、この場合の壁の確認は、掘っていた段階では不可能であったと思われる。一つのピット内から、晩期の復原可能の土器が発見され、この住居址の時期決定に重要な手がかりを与えた。また覆土内からも、晩期前葉のものとみられる。小型の無文の壺が出土している。なお、このピット内の土器は、大洞BC式のものとみられる。

この場合、覆土上より、後期初頭の土器片が多数出土していたが、これらはいずれも、このF1区、F2区が台地の裾付近に位直していたため、また地山がF3区で急激に下がっていること等より考えあわせて、台地上部から、流れ込んできたものとみられる（耕作等も考えられる）。

なお、地山確認のため、少し掘り下げたところ、この住居址より5cm下のところで、新たに数個のピットが検出された。いずれも円形で深く、非常にしっかりしていたものであった。これらピットの覆土は、この上の住居址のピットの覆土とは、ロームの混入の差等で若干異なっていた。もっと時間に余裕があり、全面的に掘り下げたなら、この確認された住居址より、古い住居址が発見されたであろうとは明言できる。

この住居址の西側に、周溝が発見されたが、よれよれの周溝で、途中で消え、一部分しか確認できず

形態も一定しないことから、この住居址に伴う可能性は薄いものとみられる。

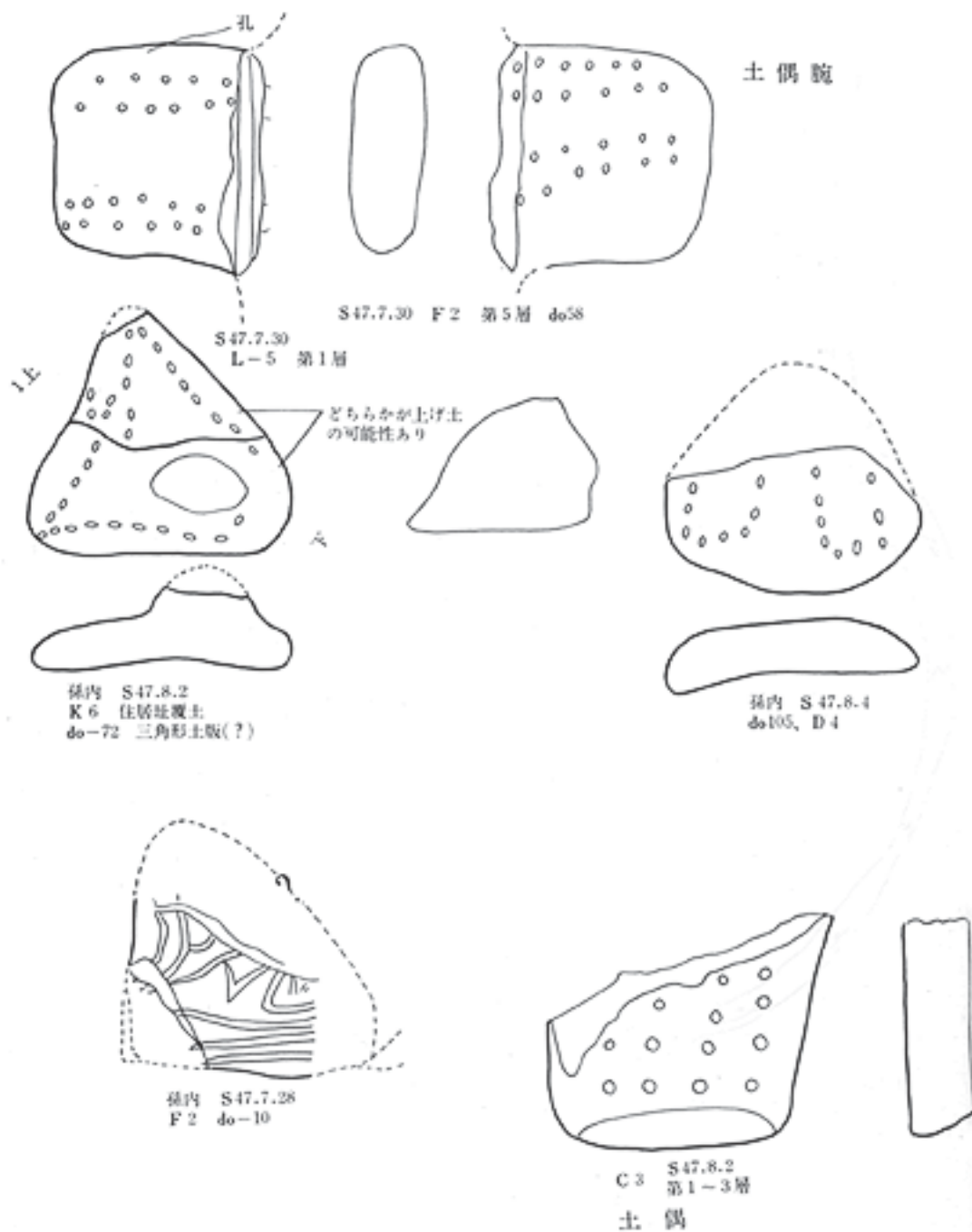
以上の事を、まとめるならば、「孫内遺跡 F1 区、F2 区にわたって、住居址が 1 基確認された。この住居址は、形態は不明瞭であるが、ピット列が確認され、中央部に石囲炉が存在し、ピット内出土の土器から、大洞 BC 式以前のものともみられ、晩期初頭のものと考えられる。

实测图 I

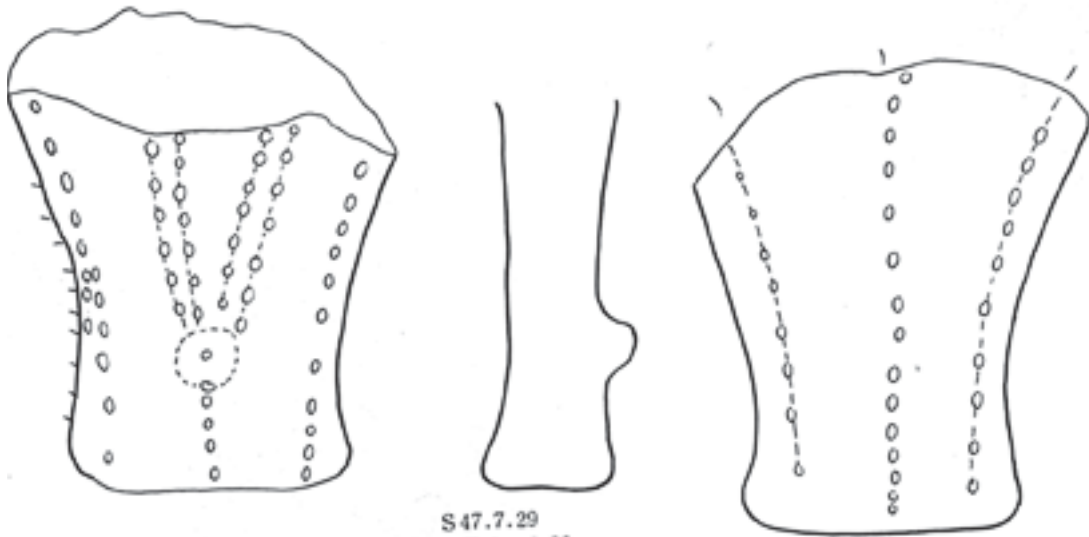




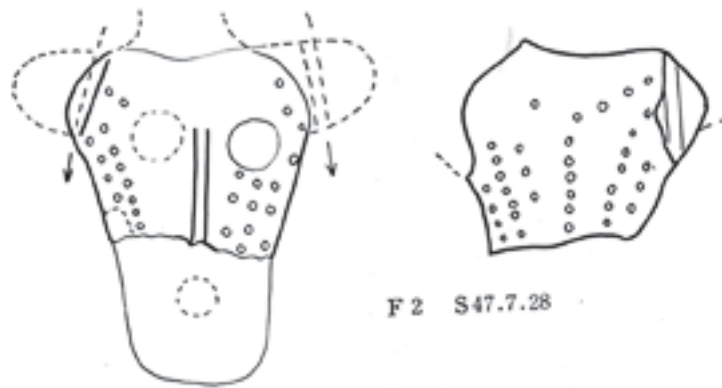
土製品、実測区



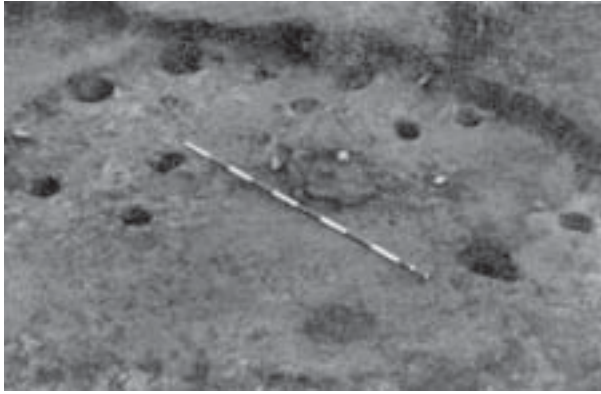
# 孫 内 (2)



S 47.7.29  
E 4 do39



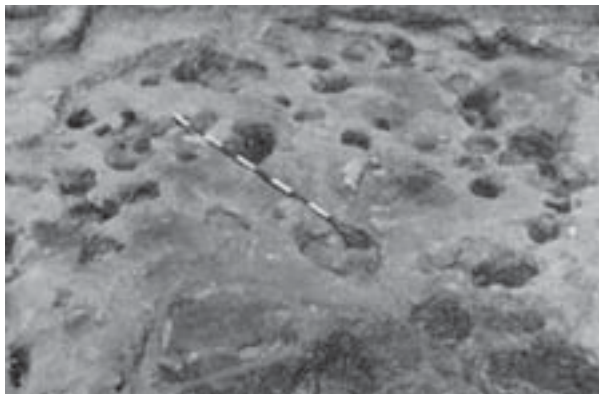
F 2 S 47.7.28



K区 石囲炉を伴う住居址



K区 炉址



E区 貯蔵穴を伴う住居址



K区 炉址住居址外に存すると思われる



D区 炉址実測状況



K区 屋外と思われる石囲炉



C、D区 住居址複合状態



F区袋状ピット





C、D区 住居址実測状況



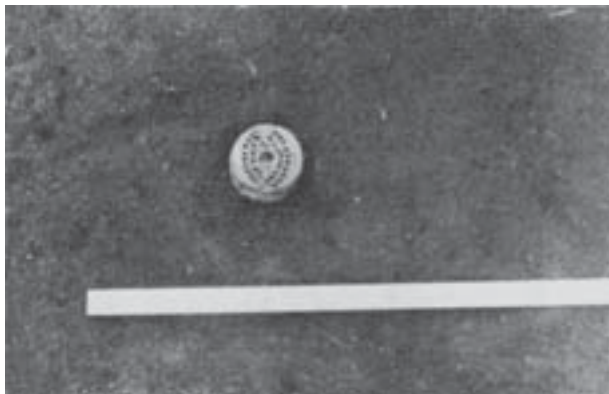
F区 晩期住居址



板状土製品出土状況



F区石皿出土状況



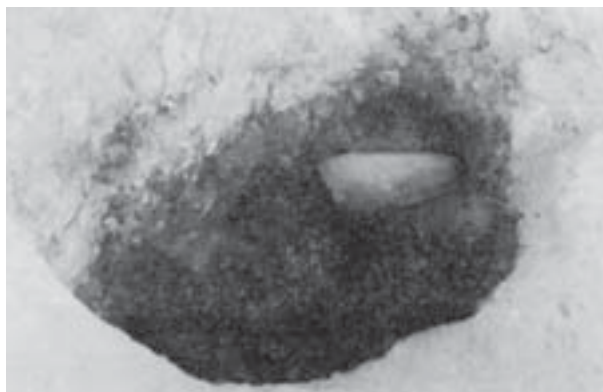
F区 耳栓出土状況



F区 土偶頭部出土状況



F区 晩期住居址ピット出土土器



D区 フラスコ状ピット内石斧出土  
状況

青森市の文化財 8  
孫内遺跡発掘調査報告書  
昭和 48 年 3 月 31 日

発行所 青森市教育委員会  
印刷所 株式会社 新印刷